

「オルタナティブ・フォークロアによる場所の再編」

研究内容要旨

本研究の目的は、2000年代ごろから現在にかけて急接近しているフォークロアとアートとの関係を整理し、社会におけるアートの新たな価値を提示することにある。そのために本論では、アーティストは凍結状態にあるフォークロアを解凍する存在であると論じる。

「フォークロア “Folklore”」とは、1846年に生まれた「フォーク “folk” (人々)」と「ロア “lore” (知識、教え、伝承)」の意味を合わせ持つ造語である。現在「フォークロア」を他の語彙に置き換える場合、習慣、信仰、儀礼、説話や民間伝承、またはそれらを研究対象とする民俗学が一般的には対応する。しかしフォークロアをこのような特定の言葉に置き換え、定義を限定することは困難である。なぜならフォークロア研究においてもフォークロアの定義は流動的であり、用語が成立した当時から現在に至るまで様々な定義づけが行われ、変化してきたからだ。

このようなフォークロアが凍結状態にあるということは、フォークロアの根元的な型が重視されフォークロアの変化や変容が許されなくなった状態を意味する。日本民俗学では、ある時期フォークロアの変化していく性質よりも、時を超えても変わらない持続性に重点を置いた研究が盛んに行われた。その結果、伝承は時間や歴史を経ても変わらないものであり、起源が古く、過去から現代にかけてより変化の少ないものに価値があるという考えが広まった。しかしフォークロアは、社会状況や環境変化に応じて変化や変容を繰り返し、伝承されてきたという特徴もある。そのようなフォークロアの変化や変容を悪とするような保存や記述のあり方を、民俗学者の加藤秀雄は「伝承の凍結」(加藤 2023: 68) と定義している。この加藤の定義を受けて本論は、アーティストが地域のフォークロアをリサーチし作品に組み込む際、凍結されていたフォークロアを解凍し、フォークロアの状態変化を起こすと主張する。そして、アーティストによるフォークロアの解凍から生まれる状態変化が成されたフォークロアを「オルタナティブ・フォークロア」と定義する。

以上の定義を踏まえて、本論では筆者の2017年から2024年にかけて制作した「オルタナティブ・フォークロア」としての芸術実践を具体例として分析していく。第1章では、筆者が「オルタナティブ・フォークロア」としての作品制作を始めた背景として、筆者に影響を及ぼした日本型アートプロジェクトの興隆や、サイトスペシフィック性の拡張などアートにおける歴史的動向を整理していく。そのために、80年代以降急接近したと言われているアートと民俗性や土着性についての動向をさらに遡ることで、かつて領域的に重なっていたアートとフォークロアが、決別を経て再び接近していく過程を整理する。

第2章の「重層的な翻訳によるフォークロアの解凍」では、具体的にフォークロアの解凍と言える芸術実践を、筆者が2017年から2021年にかけて制作した作品を例に紹介する。ここで紹介する事例においては、翻訳を行うことでフォークロアの解凍を行っているという方法における共通点がある。これらの事例では、言語の翻訳によって土地に固有の伝承や伝説を書き言葉から口語へ、標準語から方言へ、日本語から台湾語へ、そして音声へと変換することで、作品の制作が行われている。このよう

な重層的な翻訳によるフォークロアの解凍においては、フォークロアに含まれる視点が解凍され、そこに複数の視点が内在することになる。

第3章の「未踏のResearchによるフォークロアの解凍」では、アーティストのResearchやフィールドワークのあり方について考察する。アーティストがResearchを行う目的は、Researchを通じて得た知見を基にして最終的には作品を作ることであるが、近年ではResearchのプロセス自体の重要度も高まっている。しかし未だにアーティストのResearchは体系化や方法論の確立がなされておらず、その評価軸も定まっていない。それゆえに、アーティストのResearchは他分野よりも「親密性」に偏重した評価がされていることを、ここでは明らかにする。その次に、この親密性という評価基準に偏重することのリスクやデメリットを指摘し、親密性という評価軸を回避する方法として、筆者による未踏のResearchワークという実践を紹介する。

第4章の「都市開発におけるフォークロアの解凍」では、近年の都市部において、場所の文脈を踏まえたアートが希求されている状況を整理する。かつて、地方地域で芸術祭やアート・イン・レジデンスで頻繁に行われていた場所性を重視するアートプロジェクトは、現在都市部でも注目されている。そしてそれらの多くは、再開発事業の一環として行われていることが特徴でもある。しかしこれらの企画に対しては、アートが自治体や企業が求めるジェントリフィケーションの道具になっているという批判もある。これらの問題を踏まえ第4章では、アート制作によって解凍したフォークロアを、別の場所や機会において何度も伝承していくことで見えてくる可能性の検証を行う。

第5章の「埋立地におけるフォークロアの解凍」では、昨今フィールドワークの対象として俄に注目度が高まりつつある埋立地について考察する。埋立地は、第4章で触れた都市開発の手法の一つでもある。埋立地のような人工的に作られた土地は、企画段階から完成後しばらくまでの間は「新しい埋立地」として扱われ、身内とよそ者という対立構造も成立しにくい。本章ではまず、埋立地をResearch対象とした現代アートなどの実践例を紹介しながら、昨今のアーティストたちが、自主的に埋立地をフィールドとして選定する背景を探る。次に、これらの整理を踏まえて、埋立地をテーマに制作した筆者の作品を例に、埋立地が埋め立てられることで切断される場所のフォークロアを再統合する可能性をオルタナティブ・フォークロアとしての実践から示す。